

地方紙から見る明治期における郷土部隊と地域の関係 —陸軍歩兵第七連隊を事例に—

才田 裕貴

現代の日本において軍隊や兵士、その隊内での活動は、自衛隊の駐屯地がある地域等を除き身近なものではない。しかし、近代の陸軍歩兵連隊は地域と結びつきが強い存在だったと考えられている。そこで本研究では、近代軍隊と地域の関係性を、地域住民にとっての軍隊という視点から調査し、地域の住民が当時のマスメディア(新聞)から入手した郷土の部隊の情報の種類や特徴を解明することで、メディアから与えられた情報から地域の住民がどのように軍隊を見ていたか考察する一助とする。本研究の研究対象について、地方紙とは限定された地域を対象として編集、発行される新聞であり、郷土部隊とは近代陸軍の連隊が「永久的に駐屯する都市」において、地域の人々が地元の軍隊として意識した部隊である。

研究方法は文献調査である。郷土資料調査と、石川県最大手の地方紙である「北國新聞」を創刊日の明治26(1893)年8月5日から明治28(1895)年7月31日までの2年分について、金沢歩兵第七連隊やその動向に関する記事についての目録を作成、調査を行なった。研究対象には陸軍歩兵第七連隊と、その郷土である金沢を設定した。第七連隊は明治6年に6つの鎮台の隷下に置かれた14個の連隊の一つで、近代陸軍制の黎明期に作られた部隊であり、最初期に郷土部隊としての側面を持った部隊の一つでもあった。

目録から記事数の推移を見ると同時に、記事の内容によって「訓練」「戦報」「行事」「兵卒」「将校」「その他」の6つに分類し、分類ごとにどのような記事がどのような内容で報道されているかを調査した。加えて、記事内に軍人以外の活動が含まれて記載されているものを抜き出し、各分類に属している記事群の特徴や記事数を調査した。記事数は日清戦争の経過に沿って増減しており、出征した第七連隊の凱旋とともに著しく増加していたことが明らかになった。さらに、新聞は連隊の軍事的な面から社会的な面まで多面的に報道しており、特に、地域との関係についての記事は、明治26年9月30日に「歩兵第七連隊第十一中隊は行軍として去る二十七日能美郡に一泊するについて、能美郡役所兵事課員西原氏は同日同市へ出張し兵士を懇待した」とあるように、連隊が地域に根付いていると読者に感じさせるものであったと分かった。

調査対象とした時期は、徴兵制導入後初の対外戦争などを通して、郷土部隊と地域の関係が整えられていった時期であった。本研究を通して、地方紙による連隊に関する地域に沿った様々な報道やその記載方法、さらに、郷土資料と報道内容から、旧藩主前田家の存在など、多くの要因によって軍隊と地域の関係は変化、金沢の人々にとって受け入れられるものになっていき、日清戦勝を契機として、第七連隊が自分たちの部隊であると認識していくこととなっていったと考えられる。

(指導教員 白井哲哉)